



名古屋大学 21世紀COEプログラム 「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」

<http://www.coe.env.nagoya-u.ac.jp/>

August 2007

SELIS ニュースレター 第8号

SELIS-COE 外部評価委員会を開催

安成哲三（地球水循環研究センター）

5月28日-30日の3日間、本COEの外部評価委員会が本学野依学术交流館で開催された。この外部評価委員会は、本SELIS-COEが、2003年10月に開始され、2005年5月の中間評価（日本学術振興会主催）を経て最終年度を迎えるにあたり、これまでの研究・教育における成果に対する評価と、今後の展望についての提言をいただく目的で、本COE主催で行ったものである。

評価委員会の委員には、COEでの3つの研究グループ（高精度古環境復元、プロセス研究、統合モデリング）のそれぞれの内容を十分に理解していただくために、それぞれの関連分野で顕著な業績と国際的な活動をされてこられた以下の5名の先生方をお願いした。

松野太郎 博士（気候力学） 委員長

東京大学名誉教授、前海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター長、日本学士院会員

真鍋淑郎 博士（気候モデリング）

プリンストン大学客員上席研究員、元NOAA/GFDL Princeton University 首席研究員

半田暢彦 博士（地球化学）

名古屋大学名誉教授、前名古屋大学大気水圏科学研究所長、前愛知県立大学情報科学部長

Prof. An Zhisheng（古環境学）

中国科学院地球環境研究所教授、前所長、中国科学院院士（会員）

福西 浩 博士（超高層大気物理学）

東北大学名誉教授、日本学術振興会（JSPS）北京連絡事務所長

5月28日には、まずSELIS-COEの4年間にわたる全体および各グループの活動報告を、拠点リーダーである安成と、各グループリーダー（または代理）から行い、その後、午後一杯をかけて、各グループの若手を含めた研究者から顕著な研究成果についての報告を行った。29日午前には、SELIS-COEの抱える諸問題とCOE終了後の私たちの展望と計画を、グローバルCOEへの取り組みや、新たな研究教育組織への提案も含めて話題提供を、安成から行った。午後は、評価委員会だけによる会合を開き、評価案の作成をお願いした。30日午前には、評価委員会からの非公式な評価結果と提言をいただき、評価委員会は終了した。なお、松野委員長からの正式な評価報告書（英文）は、7月27日に受領した。報告書の全文は別途、外部評価委員会報告に掲載される予定であり、そちらを参照していただきたいが、このニュースレターに報告書の「結論および提言」の部分のみ要約・翻訳したものを掲載した。私たちSELIS-COEを、全体として非常にユニークで顕著な成果を伴った地球科学、地球環境学の教育・研究プログラムとして、高く評価して下さったと、私個人は感じている。評価委員会の方々に改めて感謝する次第です。

外部評価委員会による評価と提言の要約 (2007/07/27 付けの英文報告書から)

SELIS-COE プログラムの目的とゴールは、科学上の第1級の重要性を有しているだけでなく、1000年スケールの地球環境変化の予測へ向けた社会的要請にも非常にマッチしたものである。現在のところ、

このプログラムは順調に進んでおり、特に学際的な研究目標に向けた若手研究者の養成に関した取り組みは非常に順調に進んでいる。太陽・地球・生命圏（SELIS）相互作用系の解明という遠大なゴールに向けたこの努力はさらに継続すべきであり、そのために、名古屋大学で検討されている地球生命圏システム研究のための新しい研究機関の設立の計画を私たちは全面的に支持するものである。

この COE に関係している有能な若手研究者は、学際的な研究ゴールに向けて極めて大きな進展を示していることを私たちは理解した。私たちは大学および教員の方々に対し、彼らがこのプログラムの目標に向けてさらに研究ができるように、十分な留意と努力をされることを提言する。特に、この COE での新しい計画であり、さらに知識と経験の知識が必要な統合モデル開発にたいしては、更なる援助が必要である。

このプログラムのユニークな点のひとつは、地球環境変化の自然要因のひとつとして太陽活動の研究を入れていることである。過去の気候変化や現在の地球温暖化における太陽活動の影響については、まだ科学的に不確定な部分もあり、学界でも大きな議論があるが、この問題の追及を研究テーマのひとつとして含めていることは、このプログラムのユニークな点でもある。SELIS-COE は、この問題をどう進め、解明していくか、将来の研究計画にぜひ含めて考えるべきである。

このプログラムの教育プログラムの一環として、「地球学」講義と、これらの講義にもとづく本（教科書）作成が行われている。学際的な太陽・地球・生命圏相互作用系の科学的基礎として、このような努力をしていることを、私たちは非常に高く評価する。（翻訳責任者：安成哲三）